

「曾我量深の宗教的信念」

高 木 祐 紀

はじめに

本論文では、曾我量深の最晩年の説法〔1〕である「正念という平常心」や「平常心これ仏道」について考察を行う。そしてそのような説法が、我々に何を指し示すのか明らかにしていくことにする。

第一章 正念

まず第一章では、正念について見ていく。

はじめに親鸞における正念についておさえる。親鸞は、『教行信証』「信巻」において正念を転釈している。それは親鸞が、善導や法然の教えによりながら、正念は信心という意味を持つと転釈したのである。

次に、曾我量深における説法中の正念は、信心という意味で用いられている。さらに、曾我量深の説法の内容は、信心を獲得し称名していることは、如来の恩徳が深いことを信知して慶喜するたびに出てくる念仏のことで

ある。そして、その念仏が信心を獲たことを証明すると言うことができる。

第二章 平常心

第二章では平常心について見ていく。伊藤慧明は、平常心という語は鈴木大拙の愛語であり、曾我量深が平常心という語を用いるとき鈴木大拙のことが思われていることを指摘している。このことから、鈴木大拙の解釈によって平常心を検討していくことにする。

その鈴木大拙の解釈から、平常心には自然法爾の性質があると言える。

そこで自然法爾を考察していくが、寺川俊昭や佐藤正英が指摘するように『末灯鈔』ではなく「獲得名号自然法爾御書」によって考察する必要がある。

はじめに、「獲得名号自然法爾御書」の特徴である獲得名号から見ていく。佐藤正英は獲得名号について、「名号を獲得するのは、衆生たるわれわれではありえない」としている^③。この解釈について、筆者は名号を獲得するのは衆生であるという問題提起をする。しかし、獲得名号という言葉は親鸞の著作には見られないため、親鸞の著作にもある獲得信楽から考察する。

まず獲得信楽の意味は、三信を総括した信楽である信心を獲ることである。そして、獲得信楽は衆生の側についていわれたものと言うことができる。

また、獲得名号とは、信心を獲て信心が発起し如来が招喚したまうことである。その信心が発起し、如来が招

喚びたまふ仏のはたらきを、名号という語によって仏の側から表そうとしたのである。

獲得信樂と獲得名号を比較すると、どちらも、衆生が信心を獲得し、衆生の上に信心が発起し如来が招喚したまうことを意味すると言える。そうすると、獲得信樂と獲得名号は異なったことを言っているのではないということになる。また獲得する主体は、どちらも衆生である。よって、佐藤正英の「名号を獲得するのは、衆生たるわれわれではありえない」ということは言えないことが明らかとなる。

このように獲得名号の意味をおさえた上で、「獲得名号自然法爾御書」の全体の意味を見ていく。その全体の意味とは、「獲得名号」、「自然法爾」、「現生正定聚」のすべての意味をつなぎ合わせたものである。

まず、「獲得名号」とあるように、信心を獲得することである。そして、信心を獲得するところに、「自然法爾」である如来の本願力による法則がはたらく。その法則の中身として、「現生正定聚」があり、「現生正定聚」とは、流転生死を超え離れて行き去る生活が始まることである。よって「獲得名号自然法爾御書」の意味は、信心を獲たところから、如来の本願力による法則によつて身は娑婆世界にあつても心が娑婆世界に縛られておらず流転生死を超え離れて行き去る生活が始まることと言える。そしてこの「獲得名号自然法爾御書」の意味が、そのまま平常心の意味となるのである。

そして、正念と平常心の意味を照らし合わせてみると、正念と平常心はどちらも同じ意味を持っていると言うことができるのである。

このように正念と平常心について検討してきたが、次に第三章では曾我量深における仏道を見ていく。

第三章 仏道

曾我量深は、『法華経』の万行同帰の教えから、仕事が如来より与えられたものであると信じ、満足し、感謝して行うならば、すべてが仏道であるとしている。また『大無量寿経』においても、資生産業皆仏道修行であることを教えているとおさえている⁴⁾。こうした日常生活が仏道であるという曾我量深の了解は、『大無量寿経』にある如来が大行を一切衆生のために成就し与えたことによつて言えるとしているのである。

ここで考えなければならないことは、なぜ『法華経』の万行同帰が『大無量寿経』の大行を一切衆生のために与えたことによつて可能になるのかということである。

そこで『大無量寿経』と『法華経』の関係を、横超慧日の考察⁵⁾を参照に見ていく。横超慧日は、『法華経』の主張の核心は方便品と寿量品に尽きるとおさえている。横超慧日は、方便品と寿量品を考察することにより、『法華経』の教えは『大無量寿経』の教えと根本的に符合すると主張するのである。こうした主張から、『法華経』の教えには『大無量寿経』の精神を見ることができると言える。

さらに曾我量深が法華経で重要視していた箇所は、「日蓮の徒よ。地涌の自覚に目覚めよ」⁶⁾ という言葉から地涌の菩薩であると言える。そして曾我量深は、地涌の菩薩は不可思議の願船によつて娑婆世界に出現し、さらに、十方衆生、底下至愚の悪人、末法現代の人間であるとおさえている。

地涌の菩薩を底下至愚の悪人として見るのが出来た理由を考えていくにあたって、曾我量深の「法蔵菩薩阿

頼耶識論」から考えていく。

松原祐善は「法蔵菩薩阿頼耶識論」の意義について、法蔵菩薩を非神話化したものであり、それによって我々は主体的な信仰的自覚が問われてくると述べる⁷⁰。

このことから曾我量深は地涌の菩薩を非神話化したということができ、我々の信仰的自覚を問うのである。また曾我量深は、地涌の菩薩を底下至愚の悪人とおさえていたことから、悪人の自覚について機の深信から考えていく。

曾我量深の考える機の深信とは、わが身の罪障の深いことや如来の御恩の高いことも知らない愚かな人間だということ⁷¹を自覚することによって、自分が善悪を知っているという妄想に支配されることがないということである。それが機の深信であり「自信」と言える。

ここまでは「自信」の側面を見てきたが、次に「教人信」について教化との関係性を見ていく。

池田勇諦は、真宗教化を「真宗の人間像を示すもの」⁷²と定義する。そうすると、「真宗の人間像を示すもの」というのは、地涌の菩薩ということになる。つまり、曾我量深は地涌の菩薩の非神話化によって、地涌の菩薩と真宗の人間像を重ね合わせたのである。こうして地涌の菩薩の非神話化によって、地涌の菩薩を真宗の人間像と示し、そのことが真宗教化となるのである。

おわりに

以上、「正念」「平常心」「仏道」をすべて考察してきた。まず、正念と平常心はどちらも同じ意味を持ち、信心を獲て、如来の本願力による法則によって心は娑婆世界に縛られておらず流転生死を超え離れて行き去る生活が始まるのである。それは我々の機の深信の徹底であり、それが真宗の人間像を示す地涌の菩薩に例えられ、真宗教化となるのである。

こうした曾我量深の説法から我々が学ぶべきことは、信心を獲得し、機の深信を日常生活で徹底していくことである。その生活が、曾我量深の指し示す地涌の菩薩に表された仏道なのである。

注

- (1) 伊東慧明「曾我量深―真智の自然人―」『浄土仏教の思想 第十五卷 鈴木大拙 曾我量深 金子大榮』所収 一三五―一六頁
- (2) 鈴木大拙『鈴木大拙全集第二十卷』四一―四頁
- (3) 佐藤正英「親鸞における自然法爾」『講座日本思想第一卷』一五四頁
- (4) 曾我量深『曾我量深選集第十二卷』九七―八頁
- (5) 横超慧日『法華經序説』一〇六一―一三頁
- (6) 安田理深・茂田井教亨『不安に立つ』五〇頁
- (7) 松原祐善『松原祐善講義集第二卷』五三頁
- (8) 池田勇諦「自信教人信―真宗教化の位置―」『同朋大学論叢』四九 一一頁